

セネガル：国土開発整備計画に参加して

著者	三島 禎子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1990-09
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008645



国土開発整備計画に参加して

しながら民族大移動といった趣きでわれわれはダカールを出発した。青色のミニバスにぎゅうぎゅう詰めになって、屋根には4カ月の農村生活に必要なマットレスや色とりどりの鹽、はち切れそうなトランクなどをミニバスと同じくらいの高さにまで積み上げ、さすがに道行く人が振り返るほど、それは奇妙奇天烈な一行であった。また車の中も、仲間との新しい生活が始まるという期待と興奮、それにしばらくは都会の刺激から遠ざかるのだという諦めの思いが混ざり合い、ただの旅行者が乗っているという雰囲気ではなかった。

1 国立経済応用学院 (ENEA)

ところで「われわれ」というのは、セネガルの首都ダカールにある国立応用経済学院 (ENEA) の学生のことである。ENEAは、西アフリカ諸国から集まったさまざまな国籍の人間と、在職中でありながら、3年間、就学する機会を得た人たちが、そして、高卒後すぐに進学してきた学生たちが、一緒になって国の発展について意見を交わすところである。

ENEAでは民衆の側から問題を捉えようという理念のもとに、農村経済を基礎に、社会コミュニケーション、国家開発計画、農業協同組合、国土開発整備、統計のうちから一つを専門に勉強する。また、実習と呼ばれる農村調査があり、理論習得

と同じくらいの時間がさかれる。

1988年、われわれに課せられた実習の課題は、ファティック州全域で行なわれる「草の根からの開発計画」(Planification A la Base : PAB)に参加することであった。この計画は内務省が主体となって進められるもので、地域の開発方針を立てることが目的である。

中央から内務省の職員が運転手付の軽トラックとともに県ごとに送り込まれる。そして農村普及センター(この組織は内務省の管轄下にある、職員は関係省庁から派遣されている)の職員である、所長、農業指導員、牧畜指導員、水資源・森林管理員、生活改良指導員をメンバーに加えて、PABチームができて上がる。

PABは以下の4段階に沿って進められる。

- (1) 地域の地理、社会、経済、文化的環境の把握
- (2) 住民からの問題点提起
- (3) 住民による問題解決法の摸索
- (4) 優先的開発プログラムの作成

PABの原則は住民参加である。地域の開発要員(農村普及センターの職員)と住民双方がコミュニケーションを図り、住民自身が問題点を提起したうえで、解決策を見出してゆくという過程全体を包括して、PABと呼んでいる。

われわれENEAの学生は9~10人のグループになり、五つの県に分かれそれぞれ一つの郡(Com-

munauté rurale)を担当した。ENEAの学生がPABに参加する理由は二つある。まず、PABの方法論がENEAで作られたことから、学校側にも学生にとっても、それは理論を実践にうつしてみるよい機会であるという点。そして、学生にとってはまた、卒業後の仕事のパートナーである現職の人たちと協力してPABを行なうことで、将来のためのよい経験になるという点である。

2 役人と民衆

実習に入ってから作業の第一は、県庁や農村普及センターの職員皆に顔を合わせ、村内を歩き回り、村長はじめ名士たちに挨拶をすることだった。なかなか、会いたい時に会いたい人に会えない。数え切れないほどの人に握手して回るのにかなりの時間を費やした。

われわれのグループには私の他にもう一人の女性がいて、彼女はモーリタニア人であった。彼女は挨拶に行ってもあまり握手をしたがらない。確かに、見ず知らずの何十人もの人に握手して回るのは楽な仕事ではないのだが、彼女の理由というのは、自分のところ（ブル族）では女は男に握手をしないものだ、ということだった。握手が挨拶の絶対条件であるセネガルでも、一部の地域では男は女に男同士するような挨拶をしない。しかし、彼女の理論はちょっと違う。タブーに触れるのが恐いのではなく、ブル族の上級階級に属する女性はかきずかれる存在なので、自分から握手するには及ばないと思っているようだった。

挨拶がひととおり終わると、本格的な作業が始まった。われわれが担当したニャハール郡には30余りの村があり、2、3人のグループに分かれて、それら全部の村を訪問しなければならなかった。時々、県の公用車や内務省のPAB用の軽トラック

に便乗させてもらうことがあったが、たいていは何キロメートルもの道を歩いて往復した。地図もなく、「あっちの方だよ」という言葉だけを頼りに、無人の広野をもくもくと、1時間も2時間も歩いた。長い距離や照りつける太陽よりも、ヒッチハイクさせてくれる車に決して出会うことがない空間にいるのだという現実が、その時の私には辛かった。

一方、モーリタニア人の彼女は持ち前の論理を引き出して、はっきりと「私は歩けない」と言った。「車がなければ行かない」とも言った。彼女は長い田舎道を歩くために適切な靴も衣服も持っていなかったし、用意しようとしなかった。したがって、車に乗った時でも、軽トラックの助手席に座り込み、決して荷台に上ろうとはしなかった。

もっともこのような態度は、彼女だけのものというわけではなく、たとえば農村普及センターの多くの職員が、「交通手段がないから村へは行けない」と言い続けてきたのである。モーリタニア人の彼女は、学生と外国人という謙虚であるべき立場を楯に取られて槍玉にあげられたが、実際は、多くの役人の言葉を異なった形で代弁したにすぎなかったのだと思う。

ENEAの理念は、民衆の側から問題を捉えようというものであるが、学生たちはこの思想をずっと持ち続けてゆくことができるだろうか、疑問がわいてくる。

PABの期間中に会ったお役人のなかにも、ENEAの卒業生が多数いた。ニャハール県を担当した役人もそのなかの一人だった。彼はPABの趣旨を無視しているのか、あるいは知らないのか、高慢とさえ言える態度で住民に接し、われわれを彼の支配下に入れようとした。それに対してわれわれがよく思っていないことを感じると、さまざまな手段を講じてわれわれの作業を妨害しようと試み

たのだった。

3 木の下での村会議

村会議の様子に話を移そう。

村会議は大きな木の下で行なわれる。「アフリカの民主主義は木の下から」という言葉があるらしいが、実際彼らは時間をかけて納得がゆくまで話し合いをする。さて、われわれが村へ到着し村長に挨拶を終えると、村人がゴザや椅子を持ってきてくれ、われわれは木の下で彼らが集まって来るのを待つ。村によっては、招集のためにタムタムやカルバス(大きな瓢箪の丸い部分を半球に切った器)を鳴らす。鳴らし方によって、それは男を、あるいは女を、若者を呼ぶメッセージになる。

男女別、年齢別に会議を開くのは、伝統的権威が障害にならないように、村人が自由に発言できる場を作るためである。

たとえば、ある村の女の会議では家族計画のことが話題に上り、女性は度重なる出産に疲れていると主張した。一方、男の会議では、最初のうちはこの話題を取り上げたくないかのようなだったが、後になって実は彼らも多産は経済的にも大変だと考えていたことがわかった。もし男女一緒に会議を行っていたとしたら、まず出席者のほとんどが家長の男性で占められ、家族計画は話題に上らなかっただろうし、たとえわれわれの方から誘い水をかけても、女性は男性の前で避妊方法を知りたいなどと言い出せなかったであろう。

また、女性の家事労働の軽減を図るうえでも、男性が女性の労働についての認識を持つことができれば、プロジェクトの効果も上がると言えよう。

村会議の間は、われわれは決して意見を挟まず村人の話を聞くことに努める。司会を行なううえでも、話題を分野別(自然環境、経済、社会、文化)

に分けて進めるように配慮することが必要である。

第1回目の会議は、昔と現在の違いについて聞き、今日では何が問題になっているかを、村人から提起してもらうことが目的である。

そしてわれわれはその話の内容を「絵」に描くことで、いわゆるレジメを作成する。農村ではほとんどの人が文盲である。書き言葉を持たない彼らと、なるべく彼らの時間の取り方を尊重しながら、それでも同じ話題が繰り返されたり、いろいろな話題が同時に出されたりするのを防いで合理的に話し合いを行なうために、「絵」は大きな役を果たしてくれる。しかし、あるデッサンが与え得るイメージも地域や文化背景などによって異なることがある。正確なメッセージを伝えるために、彼らの共通認識をもとにしたデッサンを提示することが求められる。

第2回目の会議では、作成された絵を持って出かけ、前回の内容を確認するとともに、解決策を彼ら自身に考えてもらう。

われわれは再び、彼らから提案された結論を絵にまとめ、最終会議に望む。この時は村人が一堂に会し、各グループによって出された問題点や解決策を聞くことになる。最後にわれわれは、優先順位を検討しながら地域の開発プログラムを立てるのである。

4 理論と現実

この一連の流れは理論上のもので、現実にはなかなか難しいものがあつた。たとえば、ある村の会議では次のような発言があつた。

「われわれには何にもわからないよ。解決策なんてものはない。あんたがたが何か提案してくれるんだったら、何でもやるよ」。

一人のこういった発言によって、村全体に消極

的な雰囲気が蔓延してしまった。過去のさまざまな為政者が民衆に強いた「従順」は、今日「受動的態度」となって住民参加を阻んでいるのである。

村人のまた別な面をみるエピソードがある。ある朝のあいさつの時の会話である。

ある村人：あなたたちは昨晚は早く寝たんだねえ。

私：あれ、いつもあなたたちの方が先じゃなかった？（彼の早寝は有名）

ある村人：ああ、そうだよね。

後に聞いた話では、その前の晩、彼の家に泥棒が侵入しようとしたのだそうだ。彼は、私に「あなたたちは、昨晚うちに入ろうとした泥棒に気がつかなかったかい」とほんとうは聞いたかったのである。私は街から来た余所者で、そのうえ外国人だったから分からなかったのだろうか。

実は、このような擦れ違いは、同国人の間にも見られる。特に街の人間と農民、役人と民衆の間での意志疎通が難しいのである。村会議の席でも、村人がほんとうに言いたいことを、われわれが汲み取ることができなかったために、話が堂々巡りになってしまったことがあった。

試行錯誤の結果、ニャハール郡の開発計画ができ上がった。それが住民によって作られたプロジェクトであることを示す例を紹介したい。

まず、いくつかの村で保健センターの必要性が強く主張された。そして、薬は郡の予算から購入すること、保健夫（婦）の研修についても農村普及センターの生活改良員が担当すること、保健センターの建設費は村の住民が負担することが、村人自身によって決定された。

また、子供の就学率、進学率を高めるために女性たちが考え出したのは、遠い村から通ってくる子供たちのための給食制度であった。

5 PABの意義

最後にPABのメリットを考えてみたい。

植民地時代以来、農民は権力者（それは植民地政府であったり、宗教的指導者であったり、独立後の行政府であったりした）の言いなりになることだけを求められてきた。独立後の開発計画も半ば政府の命令といった趣があった。また、諸外国のさまざまな恩恵をはらんだ開発プロジェクトにおいても、農民は彼ら自身の見解や価値観とは別のところで計画された発展を強いられてきた。

1984年に打ち出された新農業政策（NAP）は、政府の役割縮小と、農民が彼ら自身の生産活動に責任を持つことを謳っている。そして今日では農民は自由になったが、自らの思惑や決定とは何ら無関係に放り出され逡巡しているというのが実情であろう。

一方、為政者は民衆と接触し彼らの心を掴む術を失って久しい。

世界の動きは、これまでの開発計画の見直しを求めている。すなわち、環境や住民を無視した開発ではなく、また単に人道的なだけではなく、住民参加に基づく民主的な開発こそが、真の発展に必要なのだという反省である。

このような開発を行なうためには、為政者と民衆の間の隔壁を取り除くことが必要になってくる。ここにPABの意義が見出せると思う。民衆には自ら模索する意欲を与え、為政者には「草の根からの開発計画」を支え推進してゆくための意識改革を促進するという意味においてである。つまり、双方のコミュニケーション以前に存在する問題を解決してゆくことが、PABの第一歩と言えるのではないだろうか。

（みしま・ていこ／津田塾大学大学院国際関係学研究科）